



TITLE:

# 我が教室10年間(1949～1958)の泌尿生殖器異常に関する統計的観察

AUTHOR(S):

増田, 京

---

CITATION:

増田, 京. 我が教室10年間(1949～1958)の泌尿生殖器異常に関する統計的観察. 泌尿器科紀要 1959, 5(5): 333-337

ISSUE DATE:

1959-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111764>

RIGHT:

〔泌尿器科 5 卷 5 号〕  
昭和34年 5 月

## 我が教室10年間（1949～1958）の泌尿生殖器 異常に関する統計的観察

久留米大学医学部泌尿器科学教室（主任 重松 俊教授）

副 手 増 田 京

### Statistical Observation Concerning Urogenital Anomaly of the Last Ten Years in Our Clinic (1949～1958)

Takashi MASUDA

*From the Department of Urology, Kurume University School of Medicine.*

*(Director : Prof. S. Shigematsu, M. D.)*

The author has made a statistical observation of the urogenital anomaly, 113 cases, of the last ten years in our clinic.

1. There were, in the last ten years, 113 cases of patients with urogenital anomaly, and they are 1.9 per cent of all of urogenital patients.

2. Although patients of anomaly had a tendency to increase year by year after 1953, it seems to me that is due to the progress of urology and the improvement of sanitation which enables us to discover it more easily.

3. Also, although patients of anomaly having operations have had a tendency to increase year by year after 1953, it seems to me that is due to the improvement of the plastic operation with the development of antibiotics, not to speak of progress of urology.

#### 緒 言

泌尿生殖器系は発生学上複雑な機構により生じるため畸型が他の臓器よりも比較的多く認められる。しかし泌尿生殖器学及び手術の進歩と共に、現在迄なほざりにしがちであつた此等の疾患群は益々その数を増しつつある現況である。

私はこの度、最近10年間の我が教室に於ける泌尿生殖器異常について、統計的観察を試み、いささか知見を得ることが出来たので、ここに報告する次第である。

#### 統計的観察

1) 各年度別に於ける外来患者数に対する比及び総比

第1表に示す如く過去10年間に我が教室を訪れた外来患者総数5703名に対し、異常疾患患者数113名で其の比は1.9%である。

第1表 各年度別に依る外来患者総数に対する比率

年度	外来数		
	外来患者総数	異常患者総数	百分率(%)
1949年	248	0	0
1950	305	0	0
1951	321	0	0
1952	419	1	0.2
1953	288	7	2.1
1954	377	13	3.4
1955	802	18	2.2
1956	882	14	1.5
1957	1012	25	2.3
1958	1049	35	2.9
計	5703	113	1.9

第2表 年令及び性別

性 年令	男	女	計	百分率
1～10	21	6	27	23.8
11～20	16	1	17	15.0
21～30	25	2	27	23.8
31～40	11	5	16	14.8
41～50	5	2	7	6.1
51～60	9	1	10	8.8
61～70	6	0	6	5.3
71～80	3	0	3	2.6
計	96	17	113	

## 2) 年令及び性別

第2表に示す如く1才～10才迄が27例（23.8%），21才～30才27例（23.8%），11才～20才17例（15.0%），31才～40才16例（14.8%）51才～60才10例（8.8%），以下51才～60才・61才～70才，71才～80才の順となっている。

第3表 職業別

患者数 職業	患者数	百分率（%）
俸給者	27	23.8
商工業	6	5.3
農業	10	8.8
肉体労働者	0	0
学生	2	1.7
無職	68	60.1
計	113	100

性別：男子に圧倒的に多く男96名（85%），女27名（15%）で男対女の比は5.5：1に相当する。

## 3) 職業別

第3表に示す如く無職が最も多く68例（60.1%），俸給者27名（23.8%），農業10名（8.8%），商工業6名（5.3%），学生2名（1.7%）の順である。

## 4) 各年に於ける分類

第4表に示す如く，包茎20例（17.6%）が最も多

第4表 各年に於ける泌尿生殖器異常の分類

年 疾患	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	計	百分率
囊 胞 腎							1		2	2	5	4.4
馬 蹄 型 腎							1	1			2	1.9
偏 側 腎 欠 損 症							1				1	0.8
先 天 性 水 腎 症								1		1	2	1.9
腎 血 管 異 常 症								1		1	2	1.9
完全重複腎盂兼完全重複尿管（偏）									2		2	1.9
完全重複腎盂兼完全重複尿管（両）									1		1	0.8
完全重複腎盂兼不完全重複尿管（偏）							1				1	0.8
不完全重複腎盂兼不完全重複尿管（偏）					1	2	1	1	1	1	7	6.1
不完全重複腎盂兼不完全重複尿管（両）								1			1	0.8
巨大尿管症（両）												
矮小腎兼不完全重複腎盂										1	1	0.8
不完全重複尿管兼尿管異常開口症						1					1	0.8
尿管脱（偏）										1	1	0.8
膀胱憩室							2	2	3	2	9	7.9
膀胱三角部異常症					1	4	3	2		4	14	12.3

尿道下裂				1	3			4	4	12	10.6
尿道脱									1	1	0.8
尿道憩室						2				2	1.9
包茎				1	3	1	4	3	8	20	17.6
矮小陰茎								5		5	4.4
仮性半陰陽						1				1	0.8
萎縮睪丸（偏）								1		1	0.8
萎縮睪丸（両）				1				1	2	4	3.5
停留睪丸（偏）							1	1	3	5	4.4
停留睪丸（両）			1			4		1	2	8	7.0
無睪丸（両）				1					1	2	1.9
急迫尿失禁									1	1	0.8

第5表 異常患者手術例数の全手術数に対する比率

年	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	計
患者数											
全手術患者数	70	38	51	100	76	123	124	131	140	158	1012
異常患者手術数	0	0	0	0	1	4	6	8	6	14	39
百分率(%)	0	0	0	0	1.3	2.5	4.8	6.1	4.2	8.2	3.7

第6表 手術加療を施行せし患者数

年	1953		1954		1955		1956		1957		1958		計		百分率
疾患	外来数	手術数	外来数	手術数	外来数	手術数	外来数	手術数	外来数	手術数	外来数	手術数	外来数	手術数	
囊胞腎	0	0	0	0	1	1	0	0	2	2	2	0	5	3	60.0
腎盂血管異常症（偏）	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	2	2	100.0
先天性水腎症（偏）	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	2	2	100.0
完全重複尿管兼完全重複腎盂（偏）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	100.0
矮小腎兼不完全重複腎盂兼不完全重複尿管兼尿管異常開口（偏）	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	100.0
不完全重複腎盂兼不完全重複尿管（偏）	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	33.3
尿管脱（偏）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	100.0
巨大尿管症（両）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	100.0
膀胱憩室	0	0	0	0	2	0	2	1	3	1	2	0	9	2	22.2
尿道憩室	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	2	1	50.0
尿道下裂	1	0	3	2	0	0	0	0	3	1	5	2	12	5	41.6
睪丸發育不全（両）	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2	2	100.0
停留睪丸（両）	0	0	0	0	4	1	1	0	1	0	2	1	8	2	25.0
無睪丸（両）	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	100.0
包茎	1	0	3	0	1	1	4	3	3	2	8	5	19	11	57.9

く、次いで停留睪丸15例 (13.3%)、膀胱三角部異常症14例 (12.4%)、重複尿管13例 (11.5%)、尿道下裂12例 (10.6%) 以下膀胱憩室、矮小陰茎、嚢胞腎、萎縮睪丸の順となり、これを各臓器別に分類すると、腎及び腎血管異常12例 (10.6%)、尿管異常15例 (13.0%)、膀胱異常23例 (20.4%)、尿道陰茎異常40例 (35.4%)、睪丸20例 (7.7%)、其の他である。

#### 5) 異常患者手術例数の全手術例数に対する比

第5表に示す如く10年間の手術患者数 1012 名に対し、異常患者手術例数は39例 (3.7%) である。1949~1952迄は異常患者を認めず、1953以降1958迄は手術患者数の増加と共に異常患者数も漸次増加し1958年に於ては14例施行し8.2%を占めている。

#### 6) 手術を施行した疾患別患者数

第6表に示す如く、腎血管異常 (偏側)、先天性水腎症 (偏側)、完全重複腎盂兼完全重複尿管兼矮小腎兼尿管異常開口 (偏側)、尿管脱 (偏側)、巨大尿管症 (両側)、睪丸發育不全 (両側)、無睪丸 (両側) に於ては100%手術加療し、以下嚢胞腎、尿道憩室、尿道下裂、不完全重複腎盂兼不完全重複尿管、停留睪丸 (両側)、膀胱憩室の順となっている。

又疾患別手術数は尿道下裂5例 (41.6%) が最も多く、次いで嚢胞腎3例 (60%)、あとは有意の差をみとめない。しかし重複尿管全例を合計すると3例を認めた。

### 総括並に考按

Bugbee and Smith and Orkin (1945) 3.7%, Budnik and Schowsky (1951) は臨床的に1.5%, 剖検例3%, Wollstein 2.3%, Dees 9.6%, Culp and Heibert 3.1%で之等に比して私の場合は1.9%でやや小さい値を示している。尙最初3年間は1例もなく、1952年に僅か1例を数えるのみであつたが、漸次年を追つて其の絶対数は増している。しかしその総患者数との比は平均を僅かに上まわる2.5%前後である。この事實は戦後の経済的不安と、我が教室が1955年迄皮膚科と共存していた事と共に最近の目覚ましい泌尿器科学の進歩に対する恩恵を受けず、検査事項等諸事万端が不十分なため、みすみす見逃していたものもあると考える。

年令及び性別については本疾患が先天性のものである故に幼小児に多い事は当然で、次いで青少年期に多かったのは其れ迄放置していたの

が社会的劣等感或は自覚により来院したものと考える。尙高令者に於ては嚢胞腎等の疾患の如く除々に臨床症状を表して来る内臓疾患のためであろう。性別については男性対女性の比は5.5:1に相当するが諸統計については我が教室程著明な変化は認められない。

職業別に於ては無職が多いのは前述の如く先天性疾患である故に幼小児に多い事が大きな役割をなしている事は当然であると言えよう。しかし農業が少なかったのは農業地帯の筑後地方をバックに持つ我が教室に於ては、いささか意外であると共に衛生思想の貧困を物語るものではないかと考える。

各年の分類に於ては前述の如く、尿道、陰茎の異常が40例で圧倒的に多く、次いで膀胱異常、尿管異常、腎及び腎血管異常の順となつてゐる。しかしながら尿道、陰茎の異常が多いのは包茎がその20例即ち50%を占めている為と考える。従つて上部尿路異常が諸文献と同じく高率を示している。次に疾患別に文献上考察したもののについて述べると、馬蹄鉄腎について、田中、赤木は剖検上0.1~0.2%、臨床0.5~0.8%であり男子に多く女子の3.5倍にあたると言う。私の場合は、異常疾患数の1.9%を占めていた。

嚢胞腎について渡辺は泌尿器科外来数の0.05%、後藤0.2%、であると言う。私の場合では5例を数え異常患者数の4.4%を占めていた。

偏側腎欠損は新大では尿路異常疾患の4%、私の場合は泌尿生殖器異常の0.9%であつた。

完全及び不完全腎盂尿管に於ては、新大で尿路異常の16.6%、私の場合泌尿生殖器異常の11.5%であつた。

巨大尿管症に於ては、新大は尿路異常の1.2%、私は、泌尿生殖器異常の0.8%であつた。

尿管異常開口について1955年富川が我が国に於ける約60例の総括的考察を試み、城戸によると1958年迄約70例に達すると述べている。又99%女性にみられ其の開口部は膣が最多で88%、Thormsの分類で第一型が45%である。

尿道下裂に於ては新大は、尿路異常の16.6%、私は泌尿生殖器異常の10.6%であつた。

尿道憩室は文献上50数例を数えるに過ぎない。

手術を施行せし患者数に於ては、第6表に示す通り1949年～1952年迄は1例の手術患者もなかったが、1953年以降年々増加の傾向をたどり1958年には13例の多きに到つた。これは泌尿器科学の発達は勿論抗生物質の発達に伴う成形手術の難点の改善及び衛生思想の普及によるものと考ええる。

### 結 語

私は我が教室に於ける10年間（1949～1958）の泌尿生殖器異常 113例 について統計的観察を行った。

1. 泌尿生殖器異常患者数は 113例 で外来患者総数の1.9%に相当する。

2. 1953年以降異常患者数は年々増加の傾向をみているが、これは泌尿器科学の進歩と衛生思想の改善によるものと考ええる。

3. 1953年以来異常患者の手術施行例も年々増加しているが、これは泌尿器科学の進歩は勿論抗生物質の発達に伴う成形手術の改善によるものと思われる。

拙筆に臨み本課題を課し終始御指導御校閲を賜つた恩師重松俊教授に深甚の謝意を表する。

### 参 考 文 献

- 1) 阿世知：腎發育不全症の1例，臨皮泌，**10**：11，1956.
- 2) 市川：腎及び輸尿管の先天性奇型について，日泌尿会誌，**36**：187，1944.
- 3) 生駒：腎畸型並に生殖器畸型を伴つた膀胱外口尿管，臨皮泌，**10**：5，1955.
- 4) 飯田：偏側腎欠損症に於ける尿管膀胱外開口に関する知見，臨皮泌，**4**：2，1949.
- 5) 一井：囊胞腎手術症例について，臨皮泌，**9**：11，1955.
- 6) 大越：腎及び尿管の先天異常の471例の統計的観察，手術，**2**：2，1948.
- 7) 田中，赤木：馬蹄鉄腎について，皮と泌，**13**：1，1951.
- 8) 野尻：尿管膀胱外開口の2例，臨皮泌，**10**：1，1956.
- 9) 松浦：いわゆる腎發育不全症について，皮と泌，**17**：4，1955.
- 10) Guiterrez, R. Clinical Management of Horseshoe Kidney : J. Urol., **73** : 25, 1955.
- 11) Smith, E. & Orkin, L. A. A Clinical & statistical study of 471 congenital anomalies of the Kidney and Ureter.: J. Urol., **53** : 11, 1945.